

## 共同体と機能体 (ゲマインシャフトとゲゼルシャフト)

高部英明

この4月より166世帯より成る自治会の会長を仰せつかっている(といっても貧乏クジを引いただけ)。さっそく運動会(5/29)、夏休み(7/30)と実施、準備に忙しい週末を過ごしている。自治会は会員の欲するところを汲み取って、会員一人一人の幸せを第一に考える組織であり、このような組織を「共同体」と言うそうです。自治会長になって組織のあり方について改めて考えさせられています。

組織には「共同体」と「機能体」があり、本来この二つは機能も目的も違う。従って、組織の管理運営に当たっては、この区別を明確に意識している必要がある。共同体は家族、地域社会や趣味の会など。これに対し、機能体は外的な目的を達成するための組織であり、ここでは組織内部の構成員の満足や親交は手段であり、本来の目的はプロジェクト完成などの組織外の目的を達成することにある。企業や研究所は本来、機能体である。機能体では「適材適所」こそ望ましく……。以上は堺屋太一の「組織の盛衰」(PHP出版)よりの抜粋。

堺屋太一という人は単なる評論家ではない。元通産官僚で、日本万博(EXPO'70)を企画、開催にこぎつけた実績がある。共に万博を推進した平松氏はその後、大分県知事として「一村一品」運動などユニークな発想の知事として活躍している。

さて、同書の第4章、「組織の死に至る病」に、組織についての興味深い分析がなされている。まず「機能体の共同体化」の危険性を指摘している。理想より現実が優先するようになるわけである。共同体化の度合を計る尺度として総花主義(集中の不能)などを掲げている。さらに「成功体験への埋没」が組織の硬直化を招く(これは宮永君が以前書いていたBragg先生の「過去の栄光を追わない」に通ずる)などの分析がある。紙面の都合でこれ以上紹介できないのが残念です。

機能体に身を置くものとして、理想と現実を踏まえたビジョンを持って、心地よい緊張感の伴う日々を送りたいと考えています。そして一端、研究所をはなれば、この一年は自治会活動を通して近所の皆さんと和気合々の雰囲気を出していきたいと願っている次第です。

最後に、堺屋太一の「危機を活かす」(講談社)の結びの章から、これからの日本に必要な方向の4点について揚げておきたい。これも研究(所)のあり方に通ずると思う。

1. 量よりも質、成長よりも効率を重視する経済構造の確立。
2. 拡大希求の共同体から、理想を実現する機能体への経営の転換。
3. 未来よりも現在、財産よりも満足という人生観による家計の定着。
4. 世界との共生を重視し、お金で引き付けるよりも夢で真似られる国創り。